

「地域におけるスポーツ実践の担い手」の養成を目的とした大学体育授業のあり方 — 「スポーツⅠ」を事例として —

侘美俊輔

●要約

近年、「地域づくり実践」の1つのツールとして、スポーツへの期待が高まっている。しかしながら、高校までの「学校体育」においては、運動の好き、嫌いな生徒の二極化が進行していると指摘されており、学習指導要領に記載されている「生涯」にわたる運動の継続に寄与しているとは言い難い現状がある。それゆえ大学体育においては、こうしたスポーツに対する負のイメージを払拭することが求められている。

本報告では、稚内北星学園大学で1年生を対象に開講されている「スポーツⅠ」の実践内容を検討する。上述した現状を受け、スポーツⅠでは、「楽しさ」や「手軽さ」に力点を置き運動が苦手な学生でも気軽に参加できるような授業づくりを行っている。その結果として運動に対する肯定的な態度、さらには「生涯スポーツ社会」の一翼を担う地域で活躍できる人材の養成を目標としている。

●キーワード

大学体育

スポーツの楽しさ

運動が苦手な学生

地域スポーツ

はじめに

2011年6月に『スポーツ基本法⁽¹⁾』が制定された。わが国では、1961年に制定された「スポーツ振興法⁽²⁾」以来となるスポーツ関連法案である。この背景には、スポーツ振興法制定から50年が経過し、スポーツを「する権利」が広く国民に浸透したことがあげられる。加えて、スポーツの目的の多様化、地域におけるスポーツクラブの誕生、プロスポーツの発展、スポーツによる国際交流など多岐にわたる要因がある。こうした状況を踏まえて誕生した『スポーツ基本法』の「前文」には、「スポーツは、世界共通の人類の文化である」とある。これに続いて、スポーツの価値、意義、役割の重要性など6点が示されている。ここでは「スポーツ基本法リーフレット」を参照して要点を確認したい。

- ①スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利
- ②全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会を確保
- ③スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上。他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響
- ④スポーツは、人と人、地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成し、地域社会の再生に寄与。心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たし、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠
- ⑤スポーツ選手の不断の努力は、人間の可能性の極限を追求する有意義な営み。国際競技大会における日本人選手の活躍は、国民に誇りと喜び、夢と感動を与え、国民のスポーツへの関心を高める。これらを通じて、我が国社会に活力を生み出し、国民経済の発展に広く寄与
- ⑥スポーツの国際的な交流や貢献が、国際相互理解を促進し、国際平和に大きく貢献するなど、スポーツは、我が国の国際的地位の向上にも極めて重要な役割

(スポーツ基本法リーフレットより引用)

本報告で、筆者に求められているのは、④にある「スポーツは人と人、地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成し、地域社会の再生に寄与」することの重要性を理解させることである。こうした「地域創造」にかかわるスポーツの重要性に関しては、とりわけ文部科学省による一連のスポーツ振興施策の中に見ることができる。例えば、1995年に始まった「総合型スポーツ地域スポーツクラブ」の「先導的なモデル事業」の実施や、さらに2000年における「スポーツ振興基本計画」などがあげられる。これらの計画の中で「生涯スポーツ社会の実現のため、できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が50パーセントとなることを目指す」として、総合型スポーツクラブの設置が推進されている。実際、稚内北星学園大学(以下、「本学」とする)が属する北海道宗谷管内においても、稚内市をはじめ、枝幸町、利尻富士町などで「総合型スポーツクラブ」の環境が整えられは

じている。

このような状況を受けて、筆者は「地域でのスポーツ実践の担い手」の養成を主眼とし、本学で「スポーツⅠ・Ⅱ・Ⅲ」という3つの実技科目を担当している。ここに力点を置いた理由は3つある。第1に、本学には運動部活動学生や体育・スポーツ系学生がいないためである。第2に、社会教育主事、図書館司書、公務員としてスポーツを活用した「まちづくり」に参画する学生が多くいると推察されるためである。第3に人口減少、過疎化が進行している北海道に留まる学生が多いためである。こうした本学学生の現状から、将来「地域でのスポーツ実践の担い手」となることを期待してスポーツの授業は構成されている。ここにいう「地域でのスポーツ実践の担い手」とは、単に競技スポーツを主眼としたスポーツ実践というよりも、むしろ「卒業後、健康づくり活動の実施、地域でのスポーツ活動に参加すること、町内での運動会、職場でのイベント、学校行事などにスポーツ活動に多岐にわたり主体的に参加できる人」という一定の包括性を持った人物像を想定している。

ここで、小学校の学習指導要領について確認しておきたい。現行の小学校体育の学習指導要領では、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」ことが目標とされている。この中では、小学生段階から「生涯にわたって」という文言が加えられ、学校体育の持つ重要性がより一層強調されている。こうした流れを受け堀と高橋(2008)は、「児童生徒が成人後もより生涯にわたって自発的にスポーツを楽しむこと」を強調しており、さらに「体育の授業においてスポーツすることの楽しさを味わわせることがますます必要になっている」と述べている。

鍋山ら(2011)は、過去31年間の「卒業生の体育実技授業に関する満足度」を調査から、学生に対して“面白さ”や“楽しさ”を提供し、高い満足度を与えるとともに、健康や運動の重要性についての進めることが生涯スポーツの推進や健康・体力の増進といった今日的課題の解決が大学体育の使命の一つである」と指摘している。

しかしながら、大橋美勝(1997)は「学校体育で扱う教材の多くは、『競争原理』に基づく競技スポーツが多く、体力があり、運動技能に優れた上手な者同士が、切磋琢磨していくものが多い」ことから、「気軽にできる、あまり練習しなくてもゲームができる、それほど体力的にきつくない、あまりお金がかからない、レクリエーション感覚で楽しめるものが少ない」と指摘している。さらに水上(2005)はこのような状況に対して、「小・中学校期の運動・スポーツ活動では、重要な他者や同世代・異世代の他者との関係性の中で継続意欲が沸き立つような共有体験が重要であり、さらに運動・スポーツに対する固定的な苦手意識を形成しないような環境づくりが重要である」との指摘を行っている。

本授業は、上述の学校体育と生涯スポーツとの連関を図るべく、前述した鍋山、大橋や水上らの批判を前提として筆者が再構成して作り上げたものである。

本学の「スポーツⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の授業においても上述した鍋山らの指摘にしたがい、「面白さ」や「楽しさ」に主眼を置いた授業構成としている。「スポーツⅠ」では、既存の学校体育によって植えつけられた可能性のある「体育嫌い」やスポーツに対して否定的なイメージを持っている学生を少なくし、スポーツに対する肯定的なイメージを作り上げることに主眼を置いている。スポーツⅡでは、既存の学校体育で実施していたスポーツ種目のルールを大幅に改変し、男女差、技術差のある学生同

士が相互に楽しめるような授業を行っている。スポーツⅢでは、学生自身により実施したいスポーツ種目を選択してもらう。その中で「男女差、技術差のある集団のなかでのどのようにスポーツを取り入れることができるのか」を学生自らに考えさせる授業展開を行っている。

本報告では、本学のスポーツ科目の中で導入教育的な側面の最も強い「スポーツⅠ」に焦点をあて、その実践内容を検証する。

1. 稚内北星学園大学「スポーツⅠ」における授業展開

1-1 「スポーツⅠ」の概要

本学の「スポーツⅠ」は1年生を対象に、昼間主クラス、夜間主クラスの2つのクラスでそれぞれ開講している。しかしながら、今年度は夜間主クラスの履修者がいなかったことから未開講である。

前項において、筆者は「地域でのスポーツ実践の担い手」を単に競技スポーツを主眼としたスポーツ実践というよりも、むしろ「卒業後、健康づくり活動の実施、地域でのスポーツ活動に参加すること、町内での運動会、職場でのイベント、学校行事などにスポーツ活動に多岐にわたり主体的に参加できる人」という一定の包括性を持った人物像を想定している。

そこで、本授業の目標を「マイ・スポーツの発見」と定めた。ここでいう「マイ・スポーツ」とは、「生涯にわたり何か1つでも継続して実施したいと思えるスポーツ」を意味する。こうした点に関しては、新学習指導要領において、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、小学校から高等学校までの12年間を見通して、各種の運動の基礎を培う時期、多くの領域の学習を経験する時期、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期といった発達の段階のまとまりを踏まえた系統性のある改善（傍点は筆者によるものである）」がなされた点からもその重要性が明らかである。上述したような「マイ・スポーツの発見」に力点を置いたスポーツⅠの授業概要は下記のとおりである。

近年、健康への関心が高まっている。小学校～高校生までは、様々な種目を体育教師に教えながら体験してきた。しかしながら、いざ大人になると、「どのスポーツをやったらいいいのか？」という疑問を持つ大人が多い。そして、とりあえず、仕方なく「ウォーキング」を実践する大人は少なくない。そこで、本授業では、楽しみながら行うウォーキングや自分自身にあったスポーツとは何か？を見つけて欲しい。そのために、様々なスポーツを少しずつ「つまみ食い」していきたいと思う。

（2011年度スポーツⅠ 授業概要）

また、前述した「地域でのスポーツ実践の担い手」となるためには、スポーツ技術以外にも、理論的側面としてスポーツの成立過程、スポーツ実施上の注意点などの知識が必要となる。その理由は、既存の学校体育による授業実践では「体育理論」が軽視される傾向にあったからである⁽³⁾。この点に関しては「なぜ、スポーツが誕生したのか」、「なぜ遊びを授業で実施するのか」といったスポーツにおける本質的な理論把握を展開することこそが、大学における体育授業の責務であるという筆者の認識によるところも大きい。そこで、本授業では5回にわたる座学による講義を実施した。

本授業は大きく分けて5つの柱から構成されている。

- ①体育・スポーツの基礎的知識
- ②身体を利用した遊び
- ③健康づくり運動
- ④ニュースポーツ
- ⑤学校体育で扱われたスポーツの実施

こうした5つの柱に沿い、②、③、④の冒頭にはそれぞれ座学を行い、その後実技を行う形態をとった。⑤に関しては、従来の学校体育で行われていた指導方法とは大きく異なる授業展開を行った。その理由は、本授業を通して「ルール」による制約を設けたゲームによって、上述した「学校体育との違い」を体験してもらうためである。

また、学生には「本授業における課題」として週に1回の「新聞スクラップ課題」の実施と、各スポーツ実技での実施内容、感想をスクラップ課題とともに第15回授業終了後に提出させることとした。なお本授業における「新聞スクラップ」とは、週1回以上、スポーツ、健康に関する新聞記事をノートに貼り、その記事に対して感想を書いてもらうこととした。こうした学生によるレポートによって実施した授業内容を反復させ、さらに新たにスポーツに対する興味、関心をだすことを目的とした。

こうした理由に基づいて、以下のシラバスを作成した(資料1)。

〔資料1〕 稚内北星学園大学「スポーツⅠ」2011年度 実施シラバス

- 第1回 ガイダンス(座学)
- 第2回 遊びから生涯スポーツへ(座学)
- 第3回 遊びと運動①
- 第4回 遊びと運動②
- 第5回 健康づくりと運動(座学)
- 第6回 ウォーキング①(体育館)
- 第7回 ウォーキング②(屋外)
- 第8回 卓球
- 第9回 ニュースポーツの創造(座学)
- 第10回 ミニバレー①
- 第11回 ミニバレー②
- 第12回 様々なニュースポーツ
- 第13回 ユニバーサルホッケー
- 第14回 従来の球技種目(バスケットボール)
- 第15回 まとめ(座学)

1-2 全15回における各授業それぞれの展開

第1回授業は、「ガイダンス」であった。授業の概要、進め方、注意事項などの基本的な事項の確認を行うとともに、「新聞スクラップ課題」についての提示も行った。また、第2章で示すアンケー

ト調査を行った。

第2回授業は、「遊びから生涯スポーツへ」というタイトルの下、プレゼンテーション形式での授業を行った。はじめに「遊び」の話をホイジンガによって提唱された「ホモ・ルーデンス」の概念や、カイヨワによる『遊びと人間』を参照した。周知のように「アゴン」¹⁾、「アレア」²⁾、「ミミクリ」³⁾、「イリンクス」といったカイヨワの4分類を紹介するとともに、遊びが多岐にわたり「自然発生的に」形成されていくことや、「文明への道とは、イリンクスとミミクリの組み合わせの優位を少しずつ除去し、代わってアゴン＝アレアの対、すなわち競争と運の対を社会関係において上位に置くことであると言ってもよからう」という一説を紹介した。その後、ノルベルト・エリアスとエリック・ダイニングによる『スポーツと文明化 - 興奮の探求 - 』を参照しながら、近代スポーツが生まれた契機の解説をした。ここで学生に強く主張することの1つに「スポーツとルール」の話がある。エリアスはイギリスにおける「狐狩り」の事例からスポーツが誕生した話を行っており、筆者も彼に依拠し「スポーツにおけるルールの重要性」を強調して伝えた。その後、多くの近代スポーツがイギリスで誕生した過程や、日本における「体育の始まり」について詳細な解説を加え、講義の終盤では「総合型地域スポーツクラブ」や「生涯スポーツ」の理念についての説明を行った。

第3、4回授業は、「遊び」の実技編であった。授業の冒頭では「手つなぎ鬼」を実施し、その後「ハンカチ落とし」⁴⁾、「だるまさんがころんだ」など「子ども時代の遊び」を実施した。第4回授業では、学習指導要領に記載されている棒、ボールなどを使用した「体づくり運動」を筆者なりにアレンジして授業を展開した。

第5 - 8回授業は、「健康づくり運動」のための座学と実技を行った。健康づくりのための予備知識として、「有酸素運動」⁵⁾、「無酸素運動」⁶⁾、「メタボリックシンドローム」⁷⁾、さらには「水分補給」の基礎知識を座学として実施した。

第6回授業では「ウォーキング」を実施した。本授業では、「靴の履き方」から実施し、正しいフォームであることを体育館の中で確認した。第7回授業では、屋外においてウォーキング中に携帯電話搭載カメラを利用して風景や自然の撮影を行う「ワンショット・ウォーキング」の実施方法や、「徒歩3分」と表記されている場合、「実際には何分かかかるのか?」、「徒歩3分で歩くためにはどのくらいの速く歩くべきか?」などの実習を行った。

第8回授業では「卓球」を実施した。本授業では、経験者、未経験者の差が大きいことが予測されることから、未経験者は「自陣コートを半分に制限する」などのハンディキャップをつけて授業を実施した(図1)。なお、本授業ではいわゆる学校体育で行う基礎練習などは一切行っていない。その理由は、現在の技能の範疇で、新たに「ルール」という制約を設けることによって試合内容が変わることを理解してもらうためである。加えて、本授業では「温泉卓球」という言葉が定着しているように本種目が非常にポピュラーなものであることを実感してもらうため、学生にはあえて「私服」で参加してもらった。



図1 ビブスを置き、コートを半分になっている（男子学生は卓球未経験者）

第9回-第13回は「ニュースポーツ」の理論と実技を実施した。野々宮徹（1993）によると、ニュースポーツ誕生の仕組みは「①創造・開発・開拓・拡大によるもの、②コラージュ（貼り合わせ）によるもの、③ダウンサイジング（軽薄短小化）によるもの」であり、今日のニュースポーツの多くは、競技性の面からいわば完成品である既存のスポーツを、時代的ニーズや個人々のニーズに沿うようにコラージュしたり、ダウンサイジングしたものである。北海道では、これまでに芽室町のゲートボール（1947）、大樹町のミニバレー（1972）、幕別町のパークゴルフ（1983）など多くのニュースポーツが誕生してきた。このような北海道におけるゲートボール、ミニバレー、パークゴルフなどのニュースポーツ創造は、「スポーツ振興の困難との背中合わせでの工夫」（笹瀬、1992）であり、大沼義彦（1998）は「北海道における地域住民のスポーツ活動やその実践に着目することは、一定の意味がある」と述べた上で、北海道における地域スポーツ実践のユニークさを指摘した。本学が稚内という北海道に立地している以上、こうしたニュースポーツの学生への紹介は、本授業の中でもとりわけ重要な位置を占めているといえるであろう。本年度は、物理的、経済的制限からニュースポーツの紹介は、「ミニバレー」、「インディアカ」、「ユニバーサルホッケー」、稚内市社会福祉協議会のご協力により「ポッチャ」を実施した。

第11回のミニバレーは学生同士のコミュニケーションを盛んにすることから、チーム替えを頻繁に行いながら、授業を展開した。また、基礎的な練習は最初の10分程度しか行わなかった。その理由は、ボールの特性上、複雑な練習をせずに学校体育程度のバレーボールの知識があればすぐにゲームができるからであった。第12回のミニバレーの授業は、ミニバレー、ソフトバレー、キッズバレーボールの3種類のボール特性の違いを理解してもらった。こうした3種の比較により、ボールの扱いやすさ、ラリーの継続回数、恐怖心の有無などを体験してもらった。

第12回は稚内市社会福祉協議会から「ポッチャ」を拝借して授業を実施した。初めて見るボール、ルールに戸惑う学生がいたものの、「パラリンピック」の正式種目、障がい者スポーツの一環として

日常的に市内で実施されていることも付言した。本授業においてもボッチャが障がい者、高齢者、地域のレクリエーションの一環として気軽に参加できる種目であることを実感してもらうため、学生にはあえて「私服」で参加してもらった(図2)。



図2 ボッチャを行っているところ(中央の女子学生が投擲者)

第13回授業は、ユニバーサルホッケーを実施した。フィールドホッケーの簡易版として普及している本種目を実施した理由は、後期(スポーツⅡ)に実施予定の「ゴール型スポーツ」への複線であった。その理由は、「スポーツⅡ」では、バスケットボール、サッカーという多くの「スポーツを不得意とする学生」が最も苦手とする傾向のある種目であった。こうしたゴール型スポーツの場合、これまでの学校体育場面では、「上手な生徒」と「下手な生徒」という2極化が進んでいるとされる。前述の大橋(1997)の指摘を踏まえるならば、ボールを主に扱うのが「上手な生徒」である場面が多く、下手な生徒はボールをほとんど触る機会がないというのが現状であった。こうした現状を改善すべく、本授業では、「一人の学生がボールを持てる時間」の制限、「男子学生が侵入できるゾーンの制限」など「ルールによる制約」を課した。その結果として、女子が得点を決めるなど、通常のゲームではなかなか見られない光景が展開された。

第14回授業は、バスケットボールを行った。授業の中では基礎的なシュート、パス練習などは一切行っていない。授業内では、前回のユニバーサルホッケーで意識した「上手な学生」、「下手な学生」の差ができないように様々なルールによる制限を設けた。その一例としては、「女子学生を男子学生の2倍の得点とすること」、「ピブスによる番号をそのまま得点とすること」など、誰もが積極的に参加すること、その意欲を高めるような実践を行った。また、アイスホッケーにおける「2ラインパス」や「オフサイド」を活用し、「ロングボールの投げ合い」や「ゴール前での待ち伏せ行為」を禁止するルールを設けてゲームを展開した。

第15回授業は全体のまとめとして、地域のスポーツ活動に学生自身が参加すること、すなわち「地域でのスポーツ実践の担い手」として学生自身が今後こうした活動を担う役割について話した。健康づくりとしての運動、ニュースポーツ、既存のスポーツルールを柔軟に運用すること、こうしたことでスポーツの技術差を埋められることを強調して、全15回の授業を終了した。また、第1回授業で周知していたとおり、「新聞スクラップ課題」の回収も同時に行った(資料2)。

〔資料2〕 学生による「新聞スクラップ課題」の一例

日付 5月31日

掲載場所：Yahoo ニュース

8月の西武ドーム戦、小・中学生は自由席無料に

西武は30日、今年8月の西武ドームで行う一軍公式戦12試合すべてについて、自由席のこども料金(原則、小・中学生)を無料にすると発表した。

東日本大震災を受け、野球で子供たちの笑顔を増やすとともに、家族で外出することで家庭での節電にも役立ててもらいたいとしている。

自由席のこども料金は通常、一般当日券が内野1200円、外野800円、一般前売り券が内野1000円、外野600円。8月開催試合のチケットは一般販売が6月25日から。

今回の試みは渡辺監督の震災復興への思いが発端になっており、「野球を見てもらうのが子供たちへのメッセージにもなるし、元気も与えたい。(家庭での節電のために)家族で来てほしい」と話している。

感想

はたして無料にすることでどれだけ子供が行くのかという正直疑問には残るが、普段なかなか行けない子どもにとっては絶好のチャンスだと思う。大胆な試みだと思うが、どうせなら大人も無料にしてはどうだろうか(会場はパニックになるか)。

節電のために来てほしいと言っているが、野球自体止めたほうが本当の節電になると私は思う。

◎今週の授業 5月30日分 第8回

今日は、卓球を行った。

今までの卓球とは違いローテーションで回すので、苦手な人でも楽しめるようなスタイルだったので、非常にやりやすかった。

うまくラリーが続かなかったのが悔しかった。卓球は、簡単なスポーツに見えて難しく奥が深いと改めて実感した。

2. 稚内北星学園大学1年生の「スポーツⅠ」実施前の現状

前章にも記載した通り、第1回授業時(2011年4月11日)にアンケート調査を行った(資料3)。回答者は21名(男15、女6)であった。質問項目は7項目で、高校時代の保健体育の成績、運動の好き嫌い、本授業に望むことなどとした。

〔資料3〕 <アンケート集計結果>

質問1. 高校時代(3年次)の保健体育の成績は?

評価5 5名
評価4 2名
評価3 10名
評価2 3名
評価1 1名

質問2. 高校時代に所属していた部活動は?

所属していた 8名(男8、女0)
野球部2名、サッカー部2名、バレー部1名、ボート部1名、陸上部1名、卓球部1名
所属していない 13名

質問3. 現在、運動をすることが好きか、嫌いか?

5(とても好き) 6名
4(やや好き) 3名
3(どちらでもない) 6名
2(やや嫌い) 4名
1(とても嫌い) 1名

質問4. 高校時代の体育授業が好きだったか?

5(とても好き) 5名
4(やや好き) 4名
3(どちらでもない) 4名
2(やや嫌い) 5名
1(とても嫌い) 2名

質問5. 10年後も運動を続けていたいと思うか?

5(とても好き) 5名
4(やや好き) 2名
3(どちらでもない) 9名
2(やや嫌い) 4名
1(とても嫌い) 0名

質問6. 質問3で、運動が嫌い(とても嫌い1、やや嫌い2)、運動が好き(やや好き4、とても好き5)に回答した学生に対してその理由は?(自由記述)

<運動が嫌いな学生>

- ・運動ができないから(3名)
- ・疲れるから
- ・運動が得意ではないから

<運動が好きな学生>

- ・運動が好きだから
- ・運動が楽しいから(4名)
- ・仲間と楽しめるから(2名)

質問7. 本授業に際して望むことは?(自由記述)

- ・楽しくできたらいい(7名)
- ・やるからには楽しくやりたい
- ・バレーがしたい(3名)
- ・成績だけでなく楽しんでいきたい
- ・特にない(2名)
- ・球技がしたい
- ・苦手な人でも楽しめる
- ・学ぶこと
- ・あまり疲れることなく楽しくやっていきたい
- ・楽しみながら学ぶ

ここで本アンケート調査結果から見てきた「本学学生のスポーツの捉え方」を2点わたって検討することとする。

まず第1に、高校時代の成績である。「評価4、5」といった好成績取得者に対して、「評価2、3」中位以下の成績である学生が多い。こうした高校時代の体育の成績は、運動に対する認識の違いを生み出していると推察される。「評価4、5」の学生の多くがQ5で「4」や「5」に回答し、さらにQ6では「運動は楽しい」、「身体を動かしたい」と回答している。つまり、運動に対して好意的なイメージを持っていることが推察される。

第2に、女子学生の傾向である。本学女子学生の全員が「評価2、3」と中位以下の成績であった。こうした女子学生のすべてが、Q6において、運動が嫌いな理由を「(運動が)できないから」と回答し、さらにQ7において本授業に対する希望として「(授業が)楽しめたらいい」と回答している。「運動ができない」という彼女らの負のイメージをどのように変えられるかが、本授業における課題として浮上してくる。

3. 「新聞スクラップ課題」から見た実技授業の感想

スポーツⅠでは、第1回授業時に「新聞スクラップ課題」の提出を単位認定に必須の課題として提示した。なお、スポーツⅠにおけるシラバス、それぞれの授業内容については、第1章をご参照いただきたい。ここに、その「新聞スクラップ課題」から見てきた各実技授業の感想を紹介する(資料4)。

〔資料4〕 <学生の授業における感想>

○遊び(第3、4回)

- ・遊ぶということと運動することはとても密接につながっていることを学びました。また普段の生活の中ではあまりたいけんすることのない運動をたくさん行ってとても新鮮に感じました。(女)
- ・普段の大学生活の中であまり話さない人と話すことができたり、チーム対抗戦を行ったりしてとても充実した時間を過ごすことができました。それからお菓子付のゲームで最後におせんべいをもらえたことがうれしかったです。(女)
- ・高校でやることはなく、まさか「大学のスポーツ」で鬼ごっこをやるとは思ってもみなかったのが新鮮という不思議な感じがした。(女)
- ・この2回の講義では「遊び」と題して鬼ごっこや、ハンカチ落としなどをやったが、私が一番楽しめたのはドッ

チビーだ。ドッチビーは力の下限があまり関係なく、このスポーツは運動が苦手な人でも、得意な人でもあまり差がなく楽しめると思った。(男)

- ・今日は体育館で鬼ごっこなどといった遊びを行った。中学高校では絶対にやらないことをやり、非常に面白かった。「(人間)知恵の輪」はかなり苦戦したものの本当に楽しめた。まさか鬼ごっこや知恵の輪などをやるとは思ってもみなかったので、次回の授業は何をやるのか全く読めない。(男)
- ・小学校でやった遊びだったので忘れていたものがほとんどだった。「じゃんけんピラミッド」の4人抜きはとても難しくあれだけ挑戦したのに、一回しか成功しなかった。(男)
- ・今日はスポーツというよりも遊びだった。(男)

○ウォーキング(第6、7回)

- ・ウォーキングをするときは、ただ歩けば言いというわけではなく楽しみながらする方が良いということ学びました。私もウォーキングをするときは「ニコニコペース」を保って楽しみながら行いたいと考えました。(女)
- ・実際に外に出て時間を計測しながら空いてみると思っていたよりもハードに感じました。ウォーキングは自分のペースで歩くのがよいと思いました。(女)
- ・6分(間)の「ニコニコペース」より、3分(間)の「しかめつらペース」で歩いた時の方がきつかった。ウォーキングは自分のペースで歩くことが大事なんだと思った。(女)
- ・普段歩いている道でもウォーキングと意識して歩くと少し違う感じがした。写真を撮ると楽しさも増えるのではないかと思った。(男)
- ・「徒歩3分の検証」は非常に興味を持った。やはり人それぞれのペースが違うので、徒歩3分という言葉はすべての人にあてはまるわけではないと感じた(男)
- ・いくつかのウォーミングアップをおこなったあと、「しかめっ面ペース」、「ニコニコペース」での比較を行った。まず、最初に目を閉じた状態で片足で立てない(閉眼片足立ち)というのは意外だった。自分は行けると思っていたのに立てず、かなりくやしい。(男)
- ・同じエネルギー消費で、楽しくやるか、時間短縮か・・・ニコニコペースでやらなければ長続きしないと思った。(男)
- ・外でのウォーキングでは普段のペースでも3分ちょっとかかってしまい、「徒歩3分」というのが意外にもきつかった。写真を撮りながら歩く(ワンショット・ウォーキング)というのは今後試してみたいと思った(男)
- ・サッカーでもプレースタイルによって紐の結び方が違うけど、ウォーキングでもあることは知らなかった。(男)
- ・バス停まで3分くらいで着くと思ったら、5分弱かかっていたのが意外だった。(男)

○卓球(第8回)

- ・中学時代にやっていたスポーツなので難なく行うことができた。最後の方は「チャンピオンゲーム」を行い、とても楽しかった(男)
- ・今までの卓球とは違い、ローテーションで回すので、苦手な人でも楽しめるようなスタイルだったので、非常にやりやすかった。(男)
- ・うまくラリーが続かなかったのが悔しかった。卓球は、簡単なスポーツに見えて奥が深いと改めて実感した。(男)

○ミニバレー(第10、11回)

- ・やわらかいボールを扱ったので、バレーをするときよりも怖くありませんでした。試合ではほかの人に迷惑をかけてしまって申し訳なかったです。(女)
- ・ずっと試合をしていたので、少し疲れしました。しかし、個人的にはとても楽しむことができて良かったです。(女)
- ・私はこのミニバレーが一番楽しかった。ミニバレーとソフトバレーは違いがあり、ソフトバレーの方が難しく感じた。授業でやっていたおかげで(学校行事の)スポーツ大会でも楽しむことができた。(男)

- ・ミニバレーは冷静に考えると今までやったことがなく、とても新鮮であった。痛くもなく簡単にできるので、これなら初心者でも十分楽しめると思う。(男)
- ・ボールが思うようにいかなかったりして、今までの体育授業で一番おもしろかった。前回の講義の内容が体(身体)で理解できたような気がする(笑)(男)
- ・前回やったミニバレー同様、楽しむことはできたが、最後の方にやったボール(キッズバレーボール)は正直面白くなかった。同じルール、コートでもボール1つでこんなに変わるとは驚きであった。(男)
- ・(3種類のボールを使用した)ミニバレーでやるのが初心者でも安心してやれるのではないだろうか。顔面にボールがあたったときはミニバレーでよかったと思った。でも、意外と痛かった。(男)
- ・めっちゃ楽しかった。普通のバレーボールよりもボールスピードが遅いから、ラリーが続く。それが一番楽しかった理由だと思う。(男)
- ・本当のバレーのボール(キッズバレーボール)だと、ボールのスピードが速いからラリーが続かなかった。やっぱり前回のボール(ミニバレー)の方が楽しかった。(男)
- ・普通のバレーは腕が痛くなるし、男子だと勢いがあるので嫌だったけどミニバレーはすごく楽しかった。元バレー部の人でも苦戦していたり(笑)(女)
- ・運動が苦手な私にもボールを渡してくれたり、チームのためにいろいろ考えてくれる人が多くていいなと思った。(女)

○ポッチャ(第12回)

- ・障がい者のスポーツのポッチャは我々がやっても非常に楽しむことができた。僕らのチームは友達が引っ張ってくれて、とてもやりやすかった印象がある。また、やってみたくと思ったスポーツだった。(男)
- ・ポッチャは簡単なスポーツに見えても意外と難しかった。簡単なスポーツではあるものの思いっきり楽しめた(男)
- ・このスポーツだったら、どんな人でもできるものだと思うし、男女差もなく遊べると思った。(男)
- ・ポッチャという障がい者向けのスポーツを実施した。私にも簡単だった。(女)

○ユニバーサルホッケー(第13回)

- ・ホッケーをするのは初めての経験で試合なんて絶対にできませんでした。しかし、同じチームの人がたくさんパスを回してくれたり、とても親切にしてくれてうれしかったです。それとゴールを決めることができたのもうれしかったです。(女)
- ・ユニバーサルホッケーはやったことがなかったので、90分だけだったがとても楽しむことができた。特にボールの扱いには苦労した。(男)
- ・ホッケーはやったことがなかったが、初心者の私でも楽しめる内容であった。思うようにボールをコントロールできなかつたし、両手で(スティックを)持つというのはなかなか難しいものであったが、それでも楽しむことができた。(男)
- ・トラップ、パスが思ったよりも難しかった。(男)
- ・女子の得点が2倍、相手コートでパスを5本つなげないとシュート禁止だったから、女子にもパスがいき、本来のみんなで楽しむスポーツができたかなって思う。(男)
- ・ホッケーはやったことがなかったので、ルールも知らなけど女子にはハンデがあったのでやりやすかった。あまり動いていないのに汗をかいたのはびっくり(女)

○バスケットボール(第14回)

- ・「4対4」で枠(コート)の中に入り練習したのがきつかった。試合ではゼッケン(ピプス)の数が点数になるという面白いルールでやれて楽しかった。(男)
- ・今までのスポーツ授業の中で一番汗をかいたのではないだろうか?(男)

- ・今までの高校のバスケット（ボール）とは違い、やはり今回も「苦手な人でも楽しめる」講義内容であった。女子にハンデをつけるなど、予想していなかったルールであった。（男）
- ・試合では女子が得点2倍だったから女子にもパスが回っていたし、男子は其中で勝てるように工夫してやった。（男）

（ ）は筆者による注釈である。

ここで学生による「新聞スクラップ課題」の「各授業の感想」の記述にあった3点を子細に検討することとする。

第1には、注目すべきものとして学生から「意外」だったという感想である。学生たちの声に多かったのは「ルール」や「用具」の変更によってゲーム内容が変わったというものである。こうした感想が寄せられた背景には「スポーツ＝学校体育」という学生の認識が強くあったと推察される。そのため「スポーツは苦手」と授業の前から決めつけていた学生が多く見受けられた。

第2には、「苦手な人でも楽しめた」、「苦手な人でも楽しめるようにしていた」という感想である。ここいう「苦手な人でも楽しめる」とはただ上級者が「手を抜く」、「手加減をする」といったことを表していない。筆者は初心者の技術的な底上げをすることを念頭に置きつつも、上級者にあえて苦戦するようなルールを適用した。たとえばバスケットボールの授業では、1人がボールを独占しないようドリブル回数の制限、ボール保持時間を5秒以内に制限すること、シュートまでには最低3回以上パスを回さなければいけないなどの「ルール」を設けた。

第3には、「ニューススポーツへの共感」である。学生の感想の中には「スポーツⅠの中でミニバレーが一番楽しかった」という声が数多く見られた。ウォーキングのような個人スポーツではなく、ミニバレーのような集団スポーツによる「楽しさ」を再確認した学生が多かったと推察される。ポッチャやユニバーサルホッケーなど他のニューススポーツについても、「初めてやったけど面白かった」という感想が多く寄せられた。ニューススポーツが初心者に対して取り組みやすく作られたメリットを学生に伝えることができた結果であろう。

4. 「スポーツⅠ」実施後のアンケート ―学生による学び―

第2章にも記載したように、第15回授業時（2011年7月25日）にアンケート調査を行った。回答者は16名（男11、女5）であった。質問項目は6項目で、本授業を終えての運動、スポーツに関する感想、ルールによってスポーツの内容が変わること、高校体育と本授業の比較、その他の感想などを調査した（資料5）。

〔資料5〕 <アンケート集計結果>

質問1. 本授業を終えて、運動・スポーツに対するイメージが変わったか？

5（とても変わった）	7名
4（やや変わった）	4名
3（どちらでもない）	4名
2（あまり変わっていない）	2名
1（全く変わっていない）	0名

質問2．ルール・用具によりスポーツの内容が変わることを理解できたか？

- | | |
|------------------|-----|
| 5（とても変わったと思う） | 13名 |
| 4（やや変わったと思う） | 3名 |
| 3（どちらでもない） | 1名 |
| 2（あまり変わっていないと思う） | 0名 |
| 1（全く変わっていないと思う） | 0名 |

質問3．今後もウォーキング以外のスポーツを続けていたいと思うか？

- | | |
|------------|----|
| 5（とても思う） | 5名 |
| 4（やや思う） | 2名 |
| 3（どちらでもない） | 7名 |
| 2（やや思わない） | 2名 |
| 1（とても思わない） | 1名 |

質問4．高校までの学校体育とスポーツⅠのどちらが楽しかったか？

- | | |
|------------|-----|
| ・高校体育 | 2名 |
| ・スポーツⅠ | 11名 |
| ・どちらともいえない | 4名 |

質問5．その他に本授業の感想は？（自由記述）

- ・楽しかった（男5名）
- ・女子でも楽しめた
- ・高校までの体育の授業とは違って少しいだけスポーツに対する印象が変わりました。
- ・高校までのスポーツは普通のバスケやバレーなどスポーツが苦手な私にとっては苦痛だったけど、このスポーツⅠを通してスポーツに対するイメージが変わり、スポーツといっても自分が思っていた以上にいろいろなものがあることを知った。
- ・やったことのないスポーツをできて良かった。
- ・ミニバレーとか結構楽しかった。ウォーキング替わり？に犬の散歩始めたら、すごく楽しくて、もう日課になりました。これからも続けようと思います。
- ・いろんな人とのコミュニケーション運動ですぐ皆と楽しくできたからである。
- ・卓球はハンデをつけても難しい。小さな玉に小さなラケットをあてるのは厳しい
- ・スポーツⅠをとってよかったと思いました。とても楽しかったです。スポーツⅡも楽しみ

質問6．スポーツⅠと高校授業の比較してみると？（自由記述）

- ・技能テストがない。皆で楽しめるように工夫されている。
- ・スポーツが苦手な人でも楽しむことができる。個人種目や器械運動がない
- ・技術面をあまり教えず、やったことのないスポーツを多くやった
- ・全員でというのが常に意識されていた
- ・技術的なことをあまりやらないで、技術ではなく誰でもできるスポーツをやっている
- ・運動が得意な人と苦手な人の差を感じさせない場面が多かった
- ・練習も少しするけど、大学の講義は基本的に楽しむ。高校の授業は練習が多く、上手さを求めるのが基本だった。
- ・「できる」事より「楽しむ」事が重要視されていたのでノビノビできた。飽きる前に次のスポーツになるので、少しさみしくはあったが楽しかった。
- ・初心者でもできるような授業になっていた。男女のハンデがないようにルールも加えられていた。

・高校までが技術の向上を主な目的としていたのに対して、スポーツⅠは運動全体について考え、行動し、運動の苦手な人も取り組みやすくしていた。

ここで「スポーツⅠ」終了後のアンケート調査から見えてきた中から、3点を子細に検討することとする。

まず第1に、学生の「スポーツに対する認識の変化」である。質問2にあるように「ルール・用具によってスポーツの内容が変わること」や質問6の自由記述の中から「スポーツに対するイメージが変わった」という感想がその根拠となる。本授業を通して筆者はニュースポーツやルールの変更を行い、学生に学校体育とは異なる視点を提供してきた。その結果として学生から上述のような回答が寄せられたものと推察される。

第2に、学生から「楽しめた」という回答が多く寄せられた。本アンケートの質問5、6（自由記述）の中に「できることより楽しむことが重要視された」という回答もあるように、こうした筆者の授業への取り組みが学生に伝わったと推察される。

第3に、こうした授業の取り組みと、前述の本授業概要にある「今後のウォーキング以外の運動継続」という筆者の最終目標とはさほど結び付かなかった。今後、「地域でのスポーツ実践の担い手」を形成するためには、課題が残る結果となった。来年度はこうした将来の運動継続をさらに促せるよう、種目の入れ替え、配置転換を行いながら本授業をブラッシュアップしていきたいと考えている。

おわりに

本報告は、「大学体育（スポーツ）科目の導入教育として」開講された「スポーツⅠ」の実践内容を検証することを目的としていた。

本授業を通して「地域でのスポーツ実践の担い手」、さらには来たる「生涯スポーツ社会の実現」を期待される本学学生に、筆者は終始一貫して「スポーツの多様性」を強調した。「スポーツ＝学校体育や近代スポーツ」を意識することの多かった学生に、本授業では「ニュースポーツ」や「学校体育とは異なる視角」を提供した。その結果として、上述したように学生から「スポーツに対するイメージがかわった」、「上手い、下手を気にせず楽しむ」ことができたという声が寄せられた。

加えて、本報告では強調していないが、本授業は「コミュニケーション」の促進という側面も担っていたと推察される。本学学生の多くは特定の決まった小集団でいることが多い。こうした特定の集団でのまま参加することを許容しない本授業では、いつもどの学生とペア、あるいはチームを組むかわからない仕掛けをとり入れた。本授業の主眼は「スポーツは、人と人、地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成し、地域社会の再生に寄与。心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たし、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠」であった。その結果として最終回の授業感想には「スポーツⅠをとらなければ、ずっと話すことの無い人もいたと思うので本当に良かった」との声が多く寄せられた。

スポーツとコミュニケーションの観点からは、これまで多くの研究がなされているが、その核心をついた論文は少ないと言わざるを得ない。この点を逆の視点から捉えるならば、その実証に多くの課題を抱えていると言わざるを得ないのが現状である。しかしながら、先に引用した過去31年間の「卒

業生の体育実技授業に関する満足度」を調査した鍋山ら(2011)の指摘の中には、「卒業後の運動習慣に『体育』での教員とのコミュニケーションや学生後のコミュニケーションに対する満足度が関与していることが明らかとなった」との報告がある。加えて「これらの満足度は(授業としての)『体育』の満足度との関係は弱かったものの、長期的には、スポーツを通じたコミュニケーションの経験が卒業後にスポーツに親しむ姿勢を形成した可能性」を示唆している。その結果から「教員と学生あるいは学生相互のコミュニケーションを促進する工夫」が重要であることを強調している。こうした鍋山らの指摘を筆者による「スポーツⅠ」の授業実践においても参照し、ある一定程度の結論を示すことが可能であろう。本授業を通して、学生は上述の感想にもあるように、単なるスポーツの授業としてではなく、同時にスポーツが人と人との関係形成に寄与することを実体験から学んだといえよう。こうしたスポーツによるコミュニケーションを学んだ彼・彼女らは近い将来、地域におけるスポーツ実践の担い手として、地域スポーツ、生涯スポーツ場面で期待されている。それは「単なるスポーツの実践」にとどまらず、将来的には「地域創造の担い手」として、本授業からその多くを学んでいることが期待される。本授業において、こうした可能性が示唆されてことから次稿ではこうしたスポーツを通じたコミュニケーションに言及していくことが本報告から見えた課題であろう。

●注

(1) 2011年6月24日公布, 同年8月24日施行

詳しくは, 下記, 文部科学省ホームページ参照

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/index.htm

(2) 1961年6月16日公布

同上 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/index.htm

(3) この点に関しては, 新学習指導要領において中学校, 高等学校保健体育科「体育理論」の位置づけが変わった。「運動やスポーツに関する知識は, 豊かなスポーツライフを継続するための源となる大切なものです。今回の改訂では, 教室などで, まとまりで学習することが効果的な内容を『体育理論』に, それぞれの運動領域で学ぶことが効果的な内容は, 各運動領域に整理されました。また, 中学校と高等学校との内容の明確化と接続の視点から, 中学校の名称も『体育理論』と呼ぶことになりました」と記載されていることから, 体育理論が重要視されているといえよう。詳しくは文部科学省のHPを参照。

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/_icsFiles/afieldfile/2011/08/22/1306082_02.pdf

●参考文献

- ・ 埴佐敏, 高橋一栄, 2008, 「生涯スポーツを志向した大学体育におけるスポーツの意義と役割」『新潟医療福祉学会誌』8(2): 52-57.
- ・ ヨハン・ホイジンガ, 高橋英夫訳, 1973, 『ホモ・ルーデンス 人類文化と遊戯』, 中央公論新社.
- ・ 水上博司, 2005, 「スポーツ少年団と中学校運動部活動の関係」『体育の科学』55(1): 15-19.
- ・ 文部科学省「スポーツ基本法リーフレット」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/24/13102_50_01.pdf
- ・ 鍋山隆弘, 富川理充, 吉岡利貢, 鍋倉賢治, 宮下憲, 2011, 「大学体育実技の需要に関する卒業生の満足度 - T大学の卒業生を対象として - 」『大学体育研究』33: 21-30.
- ・ 野々宮徹, 1993, 「ニュースポーツへの接近」, 野々宮徹研究代表, 『ニュースポーツとは何か そのスポーツ史的研究(水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書平成4年度)』, ニュースポーツ研究会: 3-16.

- ・ノルベルト・エリアス，エリック・ダイニング，大平章訳，2010，『スポーツと文明化 - 興奮の探求 - <新装版>』，法政大学出版局。
- ・大橋美勝，1997，「ニュースポーツの教材化の視点と学習指導」『学校体育』50（1）：17。
- ・大沼義彦，1998，「北海道の地域スポーツ」，須田力編『北方圏住民の生活とスポーツ』：133-178。
- ・ロジェ・カイヨワ，多田道太郎，塚崎幹夫訳，1990，『遊びと人間』。
- ・笹瀬雅史，1992，「地域に根ざす生涯スポーツの展開と動向」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』15：14-30。

●英文タイトル

“ Leaders of sport in the region practice ”way of training for the purpose of physical education in college -
A case study of “ Sports I ” -

●要約

In recent years, there have been increasing expectations that sports can be a useful tool of “ practice of community development ”. However, it has been pointed out that “ school PE ” as is taught at elementary through high schools, is one of the factors behind the ongoing polarization between those students who like sports and those who dislike them. As things stand, we have a long way to go before we realize “ lifelong sports ”, which is expressly stated in the government guidelines for teaching. Therefore, college PE is expected, among other things, to dispel this negative image of sports.

This paper aims to review the contents of “ Sports I ”, a course offered to freshmen at WakkanaiHokuseiGaku-en university. Given the circumstances mentioned above, I emphasize the “ pleasure ” and “ cushiness ” of sports so that even those students who are poor at exercise can take part in the class facilely. I hope this will help make the students form a more positive view of sports. My ultimate goal is to train human resources who play an active role in establishing a society in which people enjoy sports for life.

●キーワード

college PE

the pleasure of sports

students who are poor at exercise

community sports